或問　WAKUMON　149
No.42,（2022）pp.149-158

中国語の外来語

史有為　著・張芃蕾/鈴木武生　訳

第 3 章　外来語の性質と働き（上）

3.1　外来語の多重的性格

3.1.1　外来語の三つの側面

外来語は語彙の一部であり、当然言語記号である。また外来語は文化の伝達媒体でもあり、必然的に文化記号の一つである。さらに外来語は社会的な活動の参与者でもあり、社会の移り変わり、社会や民族の交流を反映すると同時に、それを使用する社会的成員の階層差も反映していることから、外来語は社会的記号の一つということになる。外来語は言語、文化そして社会という三つの側面を持っている、これら三つの側面から外来語を研究・観察することが可能である。実際、外来語ばかりでなく、すべての言語的記号はこれら三つの側面、三重の性格を備えている。ただ我々はこれまで長きにわたって言語的記号の持つ言語的性質のみを重視していただけで、それが原因で、他の二つの性質について体系的に観察・認識することができなかった。外来語の持つ性質は他の記号と本質的に異なるため、これを重視することは当然のことである。ただこれを文化的・社会的な性質を考慮しながら観察することで、はじめてすべてが揃い、全体を捉えた、豊かな理解を得ることができる。

また、外来語は人間が生み出し、使っているものである。人間は心を持つ動物である。したがって言語、文化、社会といった三つのすべての側面で心理的色彩を備えており、こうした面から理解を行うことが可能だ。特に形態面から見ると、外来語は、その構造的非同質性や文字の異質性によって、奥深く、捉えがたい、ぼんやりとした心的感覚を引き起こす。これについてはさらに踏み込んで研究する価値がある。

“冰淇淋”（英語 ice-cream）〔アイスクリーム〕を例に挙げると、その形態は中国語に意訳[訳者注1]された構成素と外来語から音訳された構成素が結合している。また音訳された部分の発音はすでに中国語化しているため、形態的には中国語と外国語が融合したものとなっている。また意味的側面においても、“淇淋”が何を指すのかも説明できない上に、“冰”も本来の「氷」を指していないので、“冰”と“淇淋”が語義的に融合し一体化したものとなっている。さらに一歩踏み込んで調べてみると、本来“冰淇淋”という食べ物は、古くは中国生まれとみられ、満

[訳者注1]　本章で言う意訳とは、音訳と対立する概念であり、原語の意味を訳すことを指す。翻訳界における直訳に対する意訳とは異なる。

州語の“乌他”(uta)がその原型である。同様の食べ物は、早くも明代に現れており、当時中国に来た西洋人によって持ち帰られ、それが発展し、西洋式に変わり、西洋的な味に作り直されたのである。これは素晴らしい文化交流の実例と言えよう。また今日アイスクリームは、ほぼどの冷蔵食品市場にも存在していることから、社会的に見れば“冰淇淋”〔アイスクリーム〕が現代社会の記号として、“現代”を象徴しているほか、西洋文化がアジアに浸透していることを象徴しているのである。“冰淇淋”という単語に対して、人々は特別な感情を持たないが、“可口可乐”(英語 Coca-Cola)〔コカ・コーラ〕の場合は別である。“可口可乐”は特定国の、特定メーカーの製品であり、特定商標に由来する記号である。そのため特定国のビジネスと文化による文化侵略の象徴として、先とは違った心的反応を引き起こす。この言葉については、好きな人もいれば、憎む人、嫌悪する人、一顧の値打ちもないと思う人もいる。いずれにせよ“可口可乐”はアメリカ文化の典型的な代表例であり、現代社会の代表的な記号の一つである。また“卡拉 OK”〔カラオケ〕や“DNA”といった外来語は、中国語とはあまりに形が異なるため、中国人にとって心理的反発や、何のことやら分からないといった感情を引き起こしがちであり、こうした点も見逃すことができない。

3.1.2 外来語の言語・文化的性質

民族間の言語接触は、広義で言えば文化接触であり、異なる文化同士が接触すれば必然的に文化融合がもたらされる。文化融合は器物に現れる場合もあれば、制度や人々の意識の中に現れる場合もある。外来語は文化融合が具現化したもう一つの重要な形である。言語は文化の内外に存在する。広い意味で言えば、言語は文化の一種であり、「言語文化」と呼ぶことができる。しかもこうした文化は、ある範囲において一定度他の文化に解釈を与えたり、影響を行使する力を持った非常に重要な「元文化」[1] となる。この点から見ると、当然ながら外来語も言語文化の具現物なのである。外来語の言語的性格をこのように位置付けることで、外来語が持つ特殊性をより深く捉え、理解することができる。こうした立場から見ると、外来語とは民族間における直接的・間接的な接触による産物であり、当然のことながら、異なる言語文化が融合した二重性を備えているのである。

3.2 外来語に現れる言語文化の融合

外来語は二つの言語文化が融合した結果である。こうした融合は外来語の二つの側面に現れる。一つは内容的な側面で、これには語義内容と文法内容が含まれる。もう一つは形式面で、

---

〔1〕「元文化」とは、一定度他の文化に影響力を行使したり、解釈を与えることができる文化を指す。これは人類の最も早い時期に存在した最も基盤的な文化であり、その数は極めて少ない。筆者の考えでは、少なくとも人体および性に関する観念、天人合一の思想、音楽と言語という四つの要素が元文化としての資格を決定すると思われる。史有為(1992)を参照。

音声形式、構造そして表記が含まれる。

3.2.1　外来語の内容面における言語文化の融合

3.2.1.1　語義内容における融合

内容面について言えば、外来語によってもたらされる概念は、言うまでもなくほとんどが外来の概念である。しかし、そのうちかなり多くのものが本来の原語とは異なる概念を表現している。異なる民族が交流する過程では、自然物や人工的器物、そして制度や行為など、互いに多くの異質の事物に接触する。自然物にしろ、人工物にしろ、言葉に反映され、語を通じて命名される以上、人間による認識対象となり、そこには人間の主観的意識が生じ、自然物が人文的性質を帯びるようになる。例えば、中国語の“鴛鴦”〔オシドリ〕は、漢族による認識を経て、自然物としての性格のほかに、「美しさ、睦まじさ、貞節」といった含意を持つようになった。現実には自然状態のオシドリが「貞節」という二文字に示される通りかどうかは分からないが、人間がオシドリを睦まじく貞節であることの象徴として求めているのである。この点からも、命名とは人的な加工行為であり、人間が自然に順応したり、これに手を加える過程で行われる行為なのである。したがって、その意味と形式は多かれ少なかれ文化的性格を帯びることになる。語義内容において、外来語は大きく以下の三つのタイプに分けられる。

A.　本来中国語にはなかった他民族言語の語義

一部の外来語は、長年使用されながら、その他民族言語にあった原語の意味を保持し続けている。こうした外来語は、大体が具体的事物を指示対象としているが、中には若干の抽象名詞もある。例えば、

“葡萄”（大宛語 badaga）〔ブドウ〕：二千年余り前に西域から中国に持ち込まれて以来この果物を指す語として使われている。

“涅槃”（梵語 nirvāṇa またはパーリ語 nibbana）〔涅槃〕：1900 年前に仏教とともに中国に伝わった。これまでの間、音声形式は何度も変化したが、その意味は宗教的敬虔によって終始変化せず、今でも「滅度」、「生死を脱した境地」、「仏陀の逝去」などの意味を指す。

“逻辑”（英語 logic）〔ロジック〕：二十世紀初期中国語に輸入されて以来現在に至るまで、思考の論理性およびそれを研究する科目を指す。

こうした外来語の一部は、中国語に入る際、その意味が選択的に伝えられて中国語の語彙になっているため、単に他民族語の原語と同じものではなくなっている。

“沙龙”（仏語 salon）〔サロン〕：原語は文芸や政治を討論する上流社会の集まりのほかに、応接間、レセプション、美術展覧会などの意味もあったのだが、中国語に伝わる際に最初の意味だけが取り入れられ、必ずしも「上流社会の集まり」に限定されることはなくなった。そのほかのいくつかの意味も、上流社会という意味合いと共になくなっている。

“杯葛”(英語 boycott)〔ボイコット〕:原語には「排斥」「関係を絶つ」という二つの意味があったが、中国語に輸入された際、「排斥」の意味のみが取り入れられ、単独の語義を持つ単語になった。

B. 原義が伝わった後、中国語として新たな意味に発展したもの

この種の語彙の意味は、総じてすでに原語の意味と異なっている(詳しくは、§4.1.1.1 参照)。例えば、

“菩萨”(梵語 bodhisattva)〔菩薩〕:仏教では、釈迦牟尼が仏になる前の尊称、つまり最高の悟りを得た者を指す。中国仏教では、仏の教えを広く説き、衆生を救い悟りの彼岸に渡す者を指すこともある。そのため中国語に伝わった後、民間では、品行正しく、慈悲深く、優しい人間に対する尊称として使われた。『西遊記』では、僧侶や尼僧が敬意をもって施主や信者を“菩萨”と呼んだ。また民間では“菩萨”を「慈悲深い」という意味に用い、意味が単純化された。

“站”(モンゴル語 jam)〔駅〕:もとは馬に乗って物資を輸送する人が途中で馬を換えたり休憩したりする宿場のことを指していた。元代にモンゴル語から中国語に伝わり、その後徐々に意味が変化し、今日では鉄道駅、防疫所、気象観測所、広報センター、放送局など末端の業務施設を指す。

“习明纳尔”(ロシア語 CEMNHAP)〔ゼミナール〕:中国語に借入される際、「授業中行われる討論」という部分的な意味のみが採り入れられた。これは原義から外れたある種の誤訳と言える。実際、原語は授業方法だけでなく、「クラス」に当たる編成単位も意味している。(おそらく借用が不徹底だったため、この語はまもなく“研讨班”や“讨论班”(いずれもゼミにあたる)に取って替わられた)。

“取缔”(日本語 torishimaru)〔取り締まる〕:原語では「監督する」、「管理する」という意味だったが、中国語では「取り消す」という意味に変わった。また日本語には本来動詞(torishimaru)と名詞(torishimari)の二種類があるが、中国語では動詞のみが取り入れられている。

C. 中国語に対応した同義の固有語〔訳者注 2〕がある外来語

“哈罗”(英語 hello)〔おい、もし、ちょっと〕:これは感嘆詞として、もとより概念を持たず、中国語の“喂”とまったく同じである。

“拜拜”(英語 bye-bye)〔さようなら〕:中国語の“再见”〔さようなら〕と同じで、中国語

〔訳者注 2〕原著では、中国語自身の形態素から成る語を指す術語として“固有**词**”と“自源**词**”が用いられているが、両者はほとんど同じものを指すため、本章では“固有词”も“自源词”も「固有語」と訳す。

には何の新しい概念ももたらしていない。

“波”（英語 ball）〔ボール〕：単に「ボール」を意味する。中国では早くも唐代にボールが作られていた。この単語は広東語に取り入れられたが、何の新しい意味内容も加えられてはいない。

3.2.1.2 文法内容における融合

文法機能の中国語化という面にも中国語の要素が現れる。外来語が中国語に取り入れられると、必然的に中国語文法の影響を受け、中国語の使用者と中国語の文法体系に従うことになる。こうした影響は、品詞の選択制限、品詞の類似性にかかわらず異なる機能を獲得すること、そして造語レベルにおける機能変化に現れる。例えば、

“仙”（英語 cent）〔セント〕：この語は香港ドルおよびマカオ・パタカの補助貨幣単位で、英語では複数形（cents）もある。複数形の cents（仙士）も中国語に借用されたが方言に限られおり、銅貨の意味として使用されていた。香港とマカオでは“仙”のみが使用されており、単数と複数の両方に用いられる。

“幽默”（英語 humour）〔ユーモア〕：原語が借用された時は名詞の意味を持っていたが、中国語に借入されると、かろうじて名詞的な意味を持つ場合（“有幽默”〔ユーモアがある〕、“一种幽默”〔一種のユーモア〕）を除き、むしろ主としては形容詞として用いられる。さらに離合詞〔訳者注 3〕としての用法もあり、“太幽默了”〔ユーモアたっぷり〕、“幽默极了”〔とてもユーモア感がある〕、“幽不幽默”〔ユーモアのセンスがあるかどうか〕、“幽了他一默”〔彼に冗談を言った〕などと言うことができる。

“拜拜”（英語 bye-bye）〔さようなら〕：原語は感嘆詞であるが、中国語に取り入れられると、感嘆詞のほか、“拜拜了”〔別れた〕、“跟他拜拜了”〔彼と別れた、ここでは“拜拜”は「別れる」の意味〕など動詞的用法も生まれた。さらに“拜拜了您哪！”〔さようなら／別れよう！〕という北京語特有の言い方もある。

3.2.2 外来語の形式面における言語文化の融合

本節で述べる「形式」とは、主として音韻形式と語の構造形式を指すが、このほか一部、表記形式についても触れる。外来語の音訳部分の音声は他民族の言語に由来するものである。こうした別言語の音素またはその組み合わせは中国語に受容されているとはいえ、全体的には中国語の音韻体系に従わなければならないため、多かれ少なかれ原語の音声とは異なるものとなっている。中国語の音韻体系はこうした「外国からの客人」に一定度合の「調整」を施し、「中国語の主人」に同化させる働きをする。こうした調整は主として読みの調整と語構造の調

〔訳者注 3〕離合詞とは、二つの形態素から成り、間に他の語や句を入れることができる動詞のことを指す。中国語では“离合**词**”もしくは“离合**动词**”と呼ばれる。

整という二つの側面を持つが、このほか表記形式の調整もある。

3.2.2.1 音訳部分の読みの調整

読みの調整は、音訳部分の音声、音声の調整、音節の増減、定着後に生じる縮約化と関連している。例えば、

“莱塞 / 莱泽”(“激光”、英語 laser)〔レザー〕:原語は二音節だが、一音節目の単母音［æ］と二音節目の子音［z］はともに中国語には存在しないため、それに近い音声を当てるしかない。従って、前者には二重母音の/ai/[ai]を、後者には無声摩擦音の/s/[s]（塞）または有声摩擦音の/z/[z]（泽）を代用している。近年、香港・台湾から入ってきた“雷射 / 镭射”〔レザー〕が流行っているが、これは諧音音訳〔訳者注 4〕と意訳を組み合わせた調整で、第一字の母音は/ei/[ei]となり、また第二字は原語の意味をよりよく表現するために、子音がそり舌音の/sh/[ʂ]になっている。

“赛因斯”(英語 science)〔科学〕:これは五四運動の時期に、“赛先生”として広く知られていたが、今は“科学”に取って代られている。音声面では、原語は一音節しかないが、中国語では三文字（三音節）に音訳された。苦肉の策ではあるが、これは外来語の音声を中国語の音韻体系に適合化するためである（中国語には「下降二重母音〔訳者注 5〕＋鼻音」という音節形式も、後ろに母音を伴わずに破／摩擦音で終わる音節も存在しない)。

“锶”(新ラテン語 strontium)〔ストロンチウム〕:原語は二音節だが、音素を一対一式に音訳すると、漢字五字が必要となる。漢字一字語に翻訳されたのは、明らかに、単音節言語という中国語の特徴に合わせるためであり、またそれによってこの語にはより強い造語力が与えられた。

“伽蓝”(梵語 samghārāma)〔寺院、僧侶〕:当初は“僧伽蓝摩”と訳され、漢訳を通じて音声が調整されたが、中国語は単音節言語であり、四音節語は音節が長く相性が悪いため、使用過程においてさらに調整が行われ、短縮されて“伽蓝”が常用されるようになった。

3.2.2.2 語構造の調整

外来語の内部構造における調整は、多くの場合それのみで行われるのではなく、音声の調整と同時に行われる。外来語で最も多く見られる例は単純な音訳で、構造が渾然一体化した単一語素として、それ以上の文法単位に分割することはできない。例えば、“阿司匹林”(解熱・鎮痛剤の一種。英語 Aspirin＜ドイツ語)〔アスピリン〕は四音節からなる単純語であり、意味的

〔訳者注 4〕音声転写の一種で、類似した漢字音を当てる音訳方式。

〔訳者注 5〕二重母音のうち、始まりの音質の方が聞こえ度の高いものは下降二重母音、終わりの音色の方が聞こえ度の高いものは上昇二重母音と呼ばれる。中国語の下降二重母音には ai,ei,ao,ou の四つがある。

対応を持つ二要素またはそれ以上の要素に分割することはできない。“禅那”〔禅〕や“米突”〔メートル〕は、それぞれ“禅”〔禅〕や“米”〔メートル〕に縮約されても単純語としての性質は変らない。だが語構造の調整は、一語素という形式上の枠組みを破り、いくつかの語素に分割される。これにはいくつかの方式があり、部分的な意訳、部分的もしくは全面的な諧音音訳、そして意味的標識を付け加える方法がある。

A.　部分的意訳

これは片方の部分を音訳する方法である。例えば、

“冰淇淋”（英語 ice-cream）〔アイスクリーム〕：最初の漢字は意訳だが、後の二字は連想しやすいように「水」と関係のある字に音訳されている。

“摩托车”（英語 motorcycle）〔オートバイ〕：最初の二字は音訳だが、最後の一字はやや無理をしながらも意訳が行われている。後半部分は本来自転車や三輪車という意味だが、その上位分類である「車」が意訳語として使われており、分類を好む中国語の性質と合致している。

“X 光”（英語 X-ray）〔X 線〕：前半部分は一種の音訳で、原語のアルファベットをただそのまま借用している。このほか音訳と意訳の合わせた形式として“爱克斯光”〔エックス線〕もある。

B.　部分的または全面的な諧音音訳

諧音音訳は略して“諧音訳”とも呼ばれる。かつては「音意兼訳」もしくは「音訳兼意訳」と呼ばれていた。“諧音〔訳者注 6〕”はもともと字音や語音が同じ、もしくは近いことを指すが、翻訳においては、原語と同音または近似音を持つ漢字を他民族の言語音に当てながら、漢字意味も活かすという方法を指す。漢字の意味を活かさないのであれば、一般的な「音訳」と同じになる。しかし厳密にはあくまでも音訳の範囲にあり、本当の意訳ではない。ただ、他民族言語の原語と一定の意味的関連性を持たせるために、原語音に近い音を持つ漢字の字音を諧音として選ぶのである。中には、原語とのつながりが分かりやすく、意訳とほぼ変わらないものもあるが、大半は原語との意味的つながりが比較的遠くて分かりにくいことから“諧意（音）訳”と言えるだろう。またやや無理矢理感のある訳、もしくはジョークを狙った訳もあり、こうしたものは“諧趣（音）訳”と呼べるだろう。このほか部分的な諧音音訳もある。では以下、おおむね諧音音訳の程度に従いながら例を挙げる。（§4.1.2.1.B 参照）

“士敏土”（英語 cement）〔セメント〕：これは魯迅先生によるセメントの音訳である。最後の漢字が諧音音訳に当たる。またこれとは別に“水门汀”という音訳形式も存在するが、後者

〔訳者注 6〕「諧」は「調和する」という字義を持つ。「諧音」は原音と調和する音つまり近似音、もしくはそうした近似音を持つ漢字を当てる方式を指す。また「諧意」、「諧趣」であれば、それぞれ「意味的に近い漢字」および「原語をユーモアももって表現できる漢字」を選ぶ方式を指す。

において、一字目は諧音音訳だが、三字目はただ偏旁によって原語との関連性を持たせているにすぎない。

“芒果 / 杧果”(マレーシア語 mango)〔マンゴー〕:“士敏土”〔セメント〕より、諧音音訳の程度が高い。第一字“芒 / 杧”は、原語の意味を正確に訳出しているとは言えないが植物を連想させ、同じく諧音音訳である“果”〔果物〕と組み合わせることで、中国語の固有語と混同してしまうほどの外来語となっている。

“黑客 / 骇客”(英語 hacker)〔ハッカー〕:“芒果”〔マンゴー〕より、諧音音訳の程度がさらに高い。この語の二つの構成要素はいずれも中国語でよく使われる語素であり、その組み合わせも中国語の造語法とうまく合致しており、中国語の固有語とまったくそっくりである。

“逻辑”(英語 logic)〔ロジック〕:ここでの諧音音訳はやや明確さに欠ける。“逻”は「見回る」という意味であり、決まったルートに沿って行動するという意味合いを含む。“辑”は「編集する」という意味であり、同じく、決まった順序に従って行動するという意味合いを含む。これら二字は「思考的規則性」とのイメージ的つながりがどことなく感じられる。諧音音訳では、こうしたぼやっとしたイメージ的な連想関係が必ず生じるのである。似た例として“安琪儿”(英語 angel)〔天使〕という語があるが、これもこうしたイメージ連想による諧音音訳に属する。

“瓦夜壶”(英語 wife)〔妻〕:「妻」を“瓦夜壶”として音訳したこの語は、何とも反応に困ってしまう言葉で、奥方から抗議を受けることは確実だろう。もちろんこれは諧趣音訳である。このほか似た例として、英語の message(西洋式マッサージ)を“马杀鸡”〔馬が鶏を殺す〕として音訳したものがあるが、これも諧趣音訳である。それにしても香港や台湾のマッサージ客は、「殺される」のをよくもまあ覚悟できたものである。

C. 意味的標識の付加

意味的標識は中国語では“義標”という略称でも呼ばれる。大部分の意味的標識は「類別標識」であり、語尾に位置する。語頭位置に置かれる“飾標〔訳者注 7〕”もあるが、数はきわめて少ない。また少数だが“綴標〔訳者注 8〕”もある。(詳しくは、§4.1.2.1.D 参照)

“沙丁鱼”(英語 sardine)〔イワシ〕:“鱼”という字がなければ、この指示物の種類は確定できない。そのため、「魚」を表すこの小さな類別標識は、常に後ろに付加され、省略される

〔訳者注 7〕外来語の語幹の後ろ(語尾)に付けられる標識で、標識の意味は語幹の意味と重なる。当該の外来語が音訳によるものであるため、中国語話者が意味を理解しやすくなるように付けられたものである。

〔訳者注 8〕外来語の語幹の前(語頭)に付けられる標識で、その意味は語幹の意味と重なる。“缀标”と同様に、当該の外来語が音訳によるものであるため、中国語話者が意味を理解しやすくなるように付けられたものである。

ことはない。一方、“白塔油”（英語 butter）〔バター〕、“芭蕾舞”（仏語 ballet）〔バレエ〕、“香槟酒”（仏語 champagne）〔シャンパン〕、“坦克车”（英語 tank）〔タンク〕、“高尔夫球”（英語 golf）〔ゴルフ〕などの外来語は、よく語末の漢字（類別標識）が省略される。類別標識の省略が可能かどうかは、その外来語が意味的に何を指すのかがどの程度分かるか、という基準によって変化すると言える。

“沐猴”（チベット・ビルマ語 m(j)uk/ミャンマー語 mjok）〔サル〕：多くの人は、字面だけを見て、猿が顔を拭く様子が人の沐浴姿に似ているので“沐”〔沐浴〕の字が“猴”〔猿〕に付けられたのだろう、と誤解する。実は“沐”とは“猴 / 猿”の意味である。従って“猴”〔サル〕という漢字はさらなる誤解を防ぐ類別標識として付加されたのである。

“保龄球”（英語 bowling）〔ボウリング〕：中国人が外来語の輸入に慣れてきていたためか、この語は中国語に入ると間もなくこの現行形で定着し、一字違いの“保令球”は淘汰された。理由は簡単で、最初の二字の発音が原語に近いだけでなく、中国人が好むような意味を持っていることによる。最後の一字によって、その語が属する事物の分類が分かる。

“线帕拉子”（ウイグル語 palaz）〔毛布〕：語義から見て palaz が糸で作られているため“线”（糸）は蛇足である。しかし認知的な観点から見ると必要な修飾標識である。

最新の例に“哈租”（英語 hire）〔賃貸族〕がある。この語の場合、前の漢字“哈”は諧音音訳だが原語の hire の意味を表してはおらず、後ろの漢字“租”が hire の意味を表す。さらにこれら二字が組み合わさることで動賓構造（述語動詞＋目的語）となり、賃貸生活（hire）に「憧れる（哈）」を人たちの心理的特徴をうまく描写している。しかしこの語は翻訳方式の分類が難しい。

3.2.2.3 字形の意味化

字形の意味化とは、音訳部分に当てる漢字の偏旁が、原語と意味的関連性を持つように、使う漢字を選択・調整する方法を指す。こうした融合方式は中国語特有のもので、語素の分節・統合に影響を与えることはないが、原語との間に何らかの連想や意味的関連性が生じ、その語が獲得する派生力を方向付ける。ひとたび縮約化が行われると、その字は語素を代表する正式な形声文字となり、それ自体が語素として造語力を発揮するようになる。例えば：

“柠檬”（英語 lemon）〔レモン〕：以前は原語により近い発音を持つ“黎濛（líméng）”という表記があった。だが最終的には、原音とはややずれていても、字形によって植物を連想できる新字を用いた現行訳には勝てなかった。

“骆驼”（匈奴語 dada）〔ラクダ〕：この語は二千年余り前に中原に輸入され、“橐它（tuótā）”という表記が使われていたが、その後まもなくこの語のために“驼”という形声文

字が創り出され“橐驼”〔訳者注 9〕となり、さらに一字目が形声文字化され“駏驼”となった。そして最後に一字目の音声が読み間違えにより“骆驼”となった。“驼”という字が創り出されたことで、中国語では“骆驼”を造語用に“驼”と縮約できるようになり、これにより“驼背”〔猫背〕、“驼员”〔ラクダの御者〕、“驼兵”〔ラクダに乗る兵士〕、“驼铃”〔ラクダの首につける鈴〕、“驼毛”〔ラクダの毛〕、“驼绒”〔ラクダの毛〕、“驼鹿”〔オオジカ〕など多くの新語が創り出された。

“狮子”（東イラン語 šē/šī）〔ライオン〕：西域から移入された当初は、“師子”と表記されていたが、その後意味変化により字形が変わり“狮子”となった。これにより“狮”は単独で使用できるようになり、単音節の語素として“狮舞”〔獅子舞〕、“狮吼”〔獅子の咆哮〕、“狮头鹅”〔ガチョウの一種〕、“石狮”〔石獅像〕、“舞狮”〔獅子舞を舞う〕などの語を生み出した。

“冰淇淋/冰激凌”（英 ice-cream）〔アイスクリーム〕の“冰”〔氷〕に後続する二字は、どちらの異体字表記でも偏旁諧同の原則が用いられており、“冰”と同偏字を使うと同時に、指示物との類似性を持たせている。

中国語は単音節を基本とする言語であることから、新語を作り出す際には単音節の語素が最も選びやすい。当然ながら、こうした事情によって、外来語の表記形式は逆に一定の影響を受ける。“葡萄”〔ブドウ〕などの語彙が歴史的に何度も表記的に変化してきた事実を考えると、こうした表記にかかわる要素が、民族的心情や語構成の面でどのような意味合いを持っているかを知ることができる。だが外来語は、ひとたび“諧意音訳”の段階に達すると定着化し、語彙の定型化が促進される。

译后记

《汉语外来词》是著名语言学家史有为先生撰写的一部全面、系统研究汉语外来词的语言学专著。内容涉及汉语外来词的类型、性质、构成特点以及汉语外来词的历史与发展走向。该书注重从语言、文化、社会等角度考察汉语外来词的形成和衍变，为其后的研究提供了新的理论平台。同时，该书对外来词的历史源流做了清晰的注解，将语言与历史、文化链接起来，引用人们耳熟能详的例词，深入浅出地剖析语言现象，有助于引发读者对汉语和中华文化的兴趣，帮助读者进一步了解汉语。尤其书中介绍随着改革开放以来外来词的变化，反映了中国社会在各个方面的进步与开放，更是对当代中国的一项极好的注解，是一部兼具学术性和科普性的不可多得的佳作。

经作者同意，我们将该书的第 3 章翻译成日文介绍给日本读者，希望有助于日本汉语爱好者更好地了解这本书的内容，并促进汉语的研究与交流。

〔訳者注 9〕原著では、“駏驼”となっているが、“橐驼”の間違いである。原著者の承認を得たうえで修正した。